2022 年 9 月 4 日

世界の中の日本を考える

社会政策課題研究所

所長　江崎 禎英

社会政策課題研究所　レポート No.１０

世界の中の日本を考える　― 視点を変えて日本を見る ―

かつて日本は「Japan as No.1」と呼ばれ、世界経済をリードする地位にありました。しかし、バブル経済の崩壊後、失われた 10 年、20 年と呼ばれる時期を経て、デフレ経済からの脱却もままならない状況が続いています。純国産ジェット機 MRJ の撤退や電気自動車への転換の遅れ、さらには新型コロナウイルスに対する国産ワクチンの製造の遅れなど、世界の中で日本の存在感は希薄化しつつあります。

世界の GDP に占める割合も 1995 年に 17.6%と 2 割近いレベルにまで高まったのち、米国に次ぐ第 2 位の地位を中国に明け渡す 2010 年には 8.5%になり、2021 年では 5.7%にまで低下しています。ちなみに 2021 年における第 2 位の位置にある中国の割合は 17.7%であり、日本のピーク時の割合とほぼ同じになっています。

今後日本は、「アジアの東端にある天然資源に恵まれない小さな島国として分相応に生きていくべき」といった声すらも耳にします。本当にそれで良いのでしょうか？「小さな弱い日本」のイメージを私たち日本人が自ら作り出しているとすれば残念なことです。本稿では、日本が世界の中でどのような存在なのかについて、改めて捉え直してみます。

１．　アジアの端にある小さな島国のイメージ

私たちが日本を地図上で思い描くとき、多くの方がアジア大陸の東に位置する島国を思い浮かべるのではないでしょうか。台風の進路図などで良く目にするものです。日本列島は、地殻変動によって大陸から切り離され、列島となりました。かつて、「日本沈没」という映画がありましたが、いずれは太平洋に沈んでいく運命にあるというものです。

では、次の図は何処の地図か分かりますか？

一見したところ、何処かの港の地図のように見えます。奥まった港湾と、ラグーン（砂嘴）か何かの天然の防波堤のように見えます。

実はこの地図は、先ほどの地図を左に 90 度回転して東を上にしたものです。

２．視点の転換、イメージの変更

この地図を見て、ハッと気づいた方も多いのではないでしょうか。日本は、ロシア、中国、韓国の港から太平洋に出ようとするときにその行く手を大きく塞いでいる存在なのです。日本はアジア大陸の東の端にしがみついている小さな島国ではありません。これらの国々にとって日本は、決して無視することのできない位置にあるのです。

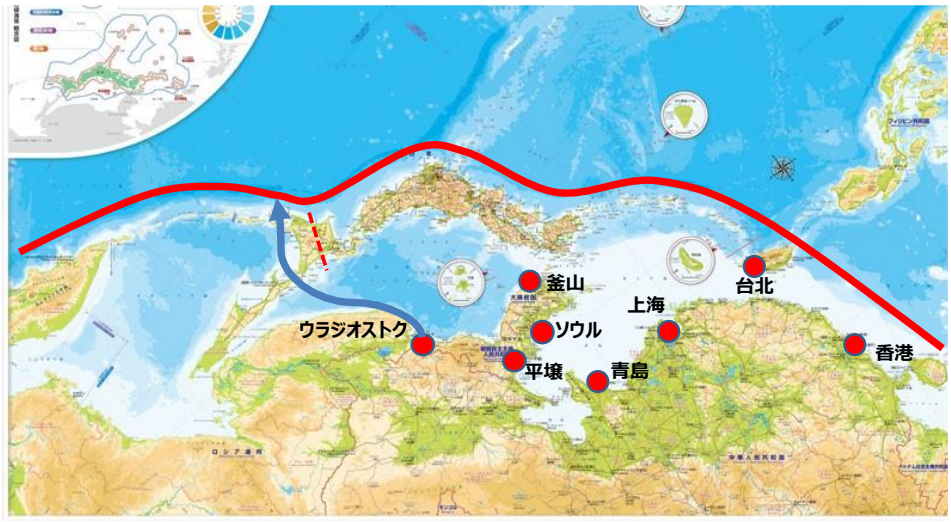
経済活動がグローバル化する中、国際貿易を行うためには太平洋に出る必要があります。そのためには、これら各国の船は必ず日本の近海を通ることになります。国際貿易への依存度が高まれば高まるほど、安全な航路の確保は重要です。

この点についてもう少し広い視点で見てみましょう。

２．　視点を変えることで見えなかったものが見えてくる

視点を変えてみると、さらにこれまで見えなかったものが見えてきます。下の地図は同じ角度で見た地図の範囲を拡大したものです。

東アジア各国の主要港湾都市から太平洋に出るには、必ず赤い線を越えていく必要があります。これら諸国が世界と繋がる際に、日本との関係がどのようなものであるのか常に意識せざるを得ないことが視覚的にも理解できると思います。



この地図に、各主要都市から太平洋に抜けるルートを重ねると、領土問題の意味が見えてきます。例えば、ウラジオストックから自国領や公海を通って太平洋に出るには北方領土を通るルートしかありません。それより北では冬には海が凍ってしまうため、北海道の近海を通ることが必要です。実は太平洋戦争が終盤を迎え、戦後処理のためのヤルタ会談で、ソ連のスターリンは、北海道の北半分（赤い点線より左）をソ連領にすることを主張していました。これが安全な航路の確保を念頭に置いたものであることは一目瞭然でしょう。

３．領土問題の意味

現在、北方領土の交渉が厳しいのは、単に領土が増えるか減るかといった問題ではなく、安全な航路の確保といった視点が加わるからです。このため、面積の小さい歯舞、色丹から返還交渉を始めてはどうかといった議論すら簡単ではないことも理解できるのではないでしょうか。

さらに、韓国や中国にとっても、太平洋に出るための安全な航路の確保は重要です。まずは韓国の釜山港からのルートを考えてみると、北回りの航路上に竹島があります。

同様に、中国の青島、上海から太平洋に抜けるルートは沖縄と台湾の間になりますが、その航路上に存在するのが尖閣諸島です。こうした島や島嶼が自国の領土になれば、その周辺の広い海域が領海となり、他国の関与を排除できるのです。

日本からの視点だけで見ていると、領土問題は単に歴史的、文化的な経緯を中心に議論されることが殆どですが、相手国側の視点に立ってみると、違った論点が見えてくるのです。

最近、北朝鮮が頻繁にミサイルを発射し、日本海に落下するケースが多く、日本としては極めて由々しき問題です。何故日本海に向けて発射するのかとの疑問を持たれる方も少なく無いでしょうが、上の地図を見るとその理由が理解出来ると思います。日本海以外の方向にミサイルを発射すれば、中国や韓国、更にはロシアの領土領海内に落下し、直ちに軍事的衝突につながる可能性が高いのです。

また、拉致問題がなぜ新潟県や石川県、鳥取県などに多いのかも、この地図を見れば視覚的に理解できると思います。

４．アジアにおける日本の存在感

日本がアジアにおいて地政学的に無視できない存在であることは理解できたと思います。しかし、日本はこれらの国々とって単に障害になっているだけの存在だけなのでしょうか。

以前、英国留学中に複数のアジアの友人から、全く違うタイミングで、全く同じこと言われました。最初はマレーシアの友人から、私が日本政府（通商産業省）の職員であると聞いた途端に「クレームがある」と言ってきました。当然、太平洋戦争に関わることだろうと思ったのですが、彼の話は全く違っていました。

彼曰く、「日本は G７サミットのメンバー国だろう。G7 というのは世界の経済や政治の方向性を決める最も重要な国際会議だ。日本はその G7 に参加している唯一の黄色人種なのに、日本の総理大臣は日本のことしか話さない。何故、『私たちアジアは、』といってアジアのことを発言してくれないんだ。」その半年後にシンガポールの友人からも全く同じことを言われました。

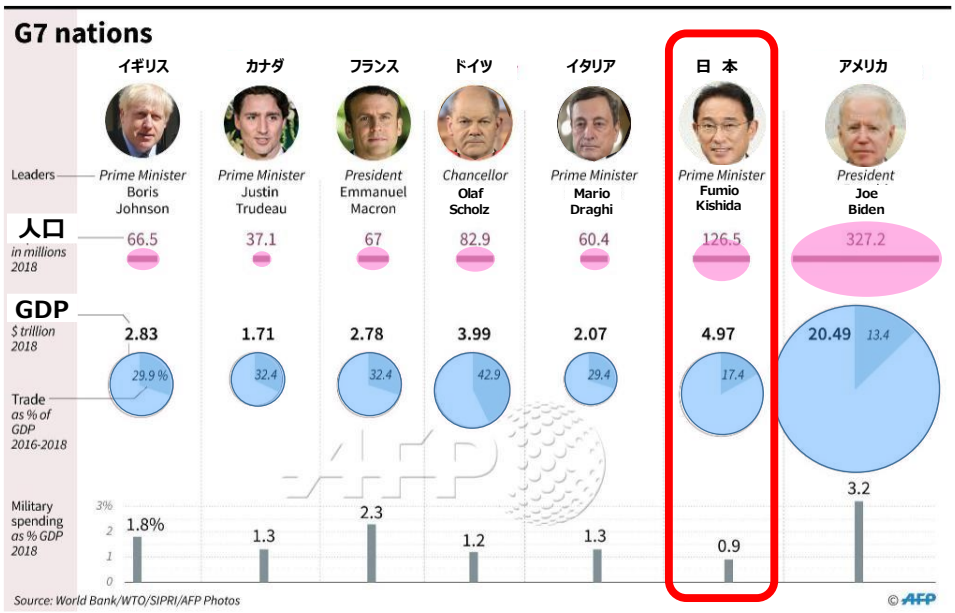
当時、通商産業省の職員でありながら、アジアの友人に指摘されるまでそうした意識を全く持っていなかったことに、大いに不明を恥じました。

５．G7 における日本の存在

しかしながら、アジアの友人からの期待とは裏腹に、日本人の感覚としては、G7 はあくまで欧米諸国がリードするものであり、日本はオブザーバー的な存在であるとの認識を持っている方も少なくないのではないでしょうか。

しかしながら、G７のメンバー国の人口や経済規模を比較してみると、日本はアメリカに次ぐ２番目に大きな国なのです。（図のデータは 2018 年　顔写真だけ更新）

【日本の立ち位置】



日本という国は、決して私たちが考えているほど小さい国ではないのです。

以前のレポートで述べた通り、今後、ウクライナの紛争が終結し、コロナが沈静化した後は、SDGs が求める価値観をいち早く実現するのは日本だと思います。

未来のために、世界のために、日本ができること、なすべきことは少なくありません。これからの私たちや次代を担う子どもたちには、多角的な視点が必要でしょう。日本から見た世界だけでなく、世界から見た日本を常に意識しながら、新たな社会の実現に向けて取り組む国でありたいと願っています。